

3月末で北見工業大を退任する前学長の鈴木聡一郎教授(65)が、2022年12月に出版した「スキー技術の真実」(合同フォレスト)が売れている。トップスキーヤーのターン動作解析の成果を分かりやすく解説。6刷を超えた心境などを聞いた。

「スキー技術の真実」著者で北見工大前学長

すずき 鈴木 聡一郎さん(65)

＝北見市

らになつてもゴールしたら速い。なぜか。その理由は簡単に説明できますよーという本です。私が勝手に書いているのではなく、分析結果で示しました」



武田選手(右)と意見交換する鈴木聡一郎教授(左)。18日、北見・若松市民スキー場

1959年、函館市生まれ。北工学部卒。アシックスの研究所でチタン製ゴルフクラブ開発後、北見工大助手に転じた。通いで東北大学院の博士号を取得し、ロボット制御などを研究する北見工大教授に。2018～23年度は同大学長を務めた。

選手の滑り細かく解析

一本ではアルペン競技で目指すべき理想のターンを分かりやすく示しています。「世界大会のコースは雪固が硬いため、軟らかい雪で培ったテクニックを駆使する日本選手は、破綻しないようにする技をほとんど磨いている状況で、確実にゴールを目指す滑りになってしまいがちです。一方、世界のトップ選手はバランスを崩して、姿勢がはらはら

びったり一致するように作業を繰り返します。一方向しか見えな画面でも、骨盤の制限や、ひざの動く方向が決まっているので、結構ひたひた合写のです。指導する学生が粘り強く、1ターンを1週間で3回くらいかけて3次元化してくれました」

「一般的にスキーヤーは、本の中にある『量産ターン』までは求められなくても、『最大効率ターン』はかなりの参考になります。「効率を良くする秘訣はいくつかありますが、スキー板の進化に伴い、特に重視したいのが、真下への重心移動でエッジを立てていく動作。エッジを立てたら真下に下がる。斜め下でもフォールラインでもない真下です。すると楽に速心力とバランスが取れます。ほぼ筋力を使う必要はないです」

ね。実践してもらえば、よりスキーの楽しさが深まると思います。1人でも多くスキー愛好者が増えてほしいと願っています」

「先生の理論を一つ一つ実践し、本の中で『こういう感覚ですよ』とコメントしているトップスキーヤーの武田選手(40)は、3月の全日本スキー技術選手権大会で、史上初の6連覇を達成しました」

「すごいです。大会の映像を見ると、武田君の上半身は常に安定し、スキーはエッジが立ち生き物のように動いています。本の技術理論は私が編み出したのではなく、世界

